ＳＡＯ☆ＴＯＫＩ

偽馬鹿

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は西暦２０ＸＸ年！

世界は……核の炎には包まれていなかった！

だがしかぁし！

ソードアートオンラインというゲームに囚われてしまい、無惨にも死を迎えるであろう老若男女を救うために、救世主が現れた！

その名もＴＯＫＩ!!!

これは圧倒的再現度（アーケード）をもってＳＡＯの世界をぶち抜く転生者の物語であぁる!!!

何か異世界にも飛んでる。

目次

その名もトキ！ ―― 1
アナザートキ！ ―― 8
リアルトキ ―― 16
マザーズロザリオ編!!!!! ―― 21
マザーズロザリオ編2!!!!!!! ―― 28
第6話 ―― 35
バトルロイヤル編！ ―― 47
ダブルデート編!! ―― 52
アリシゼーション編!!!!!!!! ―― 59
ゼロ魔編！ ―― 65
ゼロ魔編!! ―― 76
ゼロ魔編!!! ―― 87
トキフォギア ―― 102
トキフォギアトキ2 ―― 109
トキフォギア3 ―― 117
トキフォギア4 ―― 122

その名もトキ!

少年――キリトにはかなり変わったフレンドがいた。
フレンドというか知り合いというか知り合いたくなかった奴というか。
とりあえずそんな奴がいた。
その名前はトキ。
某漫画の主人公の兄であるトキを極限までトレースした変な男である。
筋肉ムキムキ、無精ひげ、そして灰色の毛髪。
その全てをトレースした。
というか本人じゃないのかこいつ。
キリトはそう思っている。
「いやまあ……流石にそれはないか……」
それはともかく。
トキは色んな面を見逃してみると普通の男である。
というか好青年と言ってもいい。
だが、トレースした人格がトキなので変人である。

「……そういえばＴＯＫＩ☆Ｔｕｂｅとかやってたらしいな……」
トキの技を再現して披露する動画だそうだ。
再現度の割には再生数は悪かった。
それはそうだ。
普通にネタ動画、もしくは釣りだと思われたのだろう。
というわけで、何故そんな男の話をしたかというと。
なんとその男、単身でエリアボスに挑むというのだ。
確かにその男は強い。
というか恐らく自分よりも色んな意味で強烈な人間なのでもしかしたらという思いもあるが。
それはそれとして、自殺一歩手前である。
流石にそれは止めるだろう。
いや止める。
というわけで止めに来たのだった。
「……折角キリト君と一緒だったのに……」
……アスナを連れて。
トキさえいなければデートであったか。

そんな気持ちは欠片もないキリトであるが。
「おいトキ!　何考えてるんだ!」
個人宅に押し入り、キリトは大声でトキを呼んだ。
なんとトキ、個人で家を持っているのだ。
曰く「装備がいらないから全て売ったら結構な額になった」とのこと。
羨ましいようなおかしいような。

とにかく、キリトが家に押し入ると、トキが胡坐をかいてすわっていた。
その姿はまるで無駄に洗練された無駄のない無駄な彫刻のよう。
というか無駄の産物だ。
キリトはそう断じてトキの肩を叩いた。
「流石にソロ討伐は無理だ!　考え直せ、トキ!」
しかし、トキは動じない。
というか動かない。
寝てるのかと思ったキリトであったが、その時になってからトキが動き出した。
ゆっくりと立ち上がったのだ。
「無理ではない」

きりっとした顔つきで言うトキ。
「激流を制するは清水……」
「いやエリアボスの攻撃は激流でも濁流でもないから！」
キリトのツッコミが冴え渡る。
流石主人公である。
なんでもできるな。
トキは肩に置かれたキリトの手をすっとどかし、そのまま歩いていこうとした。
「行かせないって言ってるだろ！」
「む、止めるなキリト。私は天啓を受けたのだ」
「それは天啓じゃなくて妄想！　絶対そうだ！」
叫ぶキリト。
止まらないトキ。
そして初めて見るキリトの狼狽する姿にちょっとドキドキするアスナ。
誰か止めろ。
「く……！　とりあえず片っ端からフレンド呼んで討伐に行くぞ！」
「ええ!?」
「仕方ないだろ！　腐ってもトッププレイヤーをむざむざ死なせるわけにはいかない

！」

キリトは再度叫ぶ。

そう、このトキ、腐ってもトッププレイヤーの一人だ。

βテスターでもないのにトッププレイヤーに名を連ねている上に、ユニークスキル持ちだ。

トキは北斗神拳とか言っているが多分嘘だ。

「とにかく！　援軍呼ぶからちょっと待ってろ！」

キリトははぁはぁ肩で息をしながらトキを説得していた。

というかこいつ全然動じない。

筋力値がけた外れに違うのだろう。

それどころかなんか強い。

主に絵面が。

それはともかく。

トキとその愉快な仲間たちは今日、突発でエリアボスに挑むのだった――――――！

「勝っちゃったよ……」

勝ちました。

しかもトキは体力を半分以上維持している。
何やったらああなるんだ人類。
「あの人、本当に強いんだね……」
「ああ、変な奴だけどな……」
キリトはげっそりとしているが、それと一緒にドロップ品の品定めとかもしていた。
ちゃっかりしている。
流石ゲームプレイヤー。
「とはいえ、犠牲者無しでの突破は久し振り、か」
トキは毎度毎度エリアボスに挑んでいるが、それでも犠牲者は出ていた。
それは、トッププレイヤーだとしても質にはどうしても差が出ることと、相性によるものだった。
今回のエリアボスは人型だった。
腕はたくさんあったが。
それでも人の域を出ない相手であり、格好の的と言えた。
とにかくトキ、対人においては最強だった。
キリトも二刀流全力で殴りかかっても勝てるかわからないレベルだ。
いや本当に。

だからこそ、こんなところで死なせるわけにはいかなかった。
流石にトキだけに任せるつもりはないが、それでも肩を預けらえる男をむざむざ殺されるわけにはいかないからだ。
「だがまあ、こいつなら変なことやらかしそうだな……」
キリトはそう呟いたが、それは現実になるのだった。

「刹活孔！　ふぅん！」
「無駄だ！　その拘束は破れなにぃ!?」
「はぁーん！」
「ぐわー！」

カヤバーン、トキのリバサ刹活孔に散る！

アナザートキ！

アルヴヘイム・オンライン編!!

キリトは確信した。
ここにも奴がいると。
「うぬがキリトか……よかろう、かかってくるがいい」
「お前トキだな!?」
というか目の前の奴だよ絶対。
ラオウだけどトキだよ中身。
「ぬぅ。我はラオウ……拳王ラオウだ」
「嘘つけええええ！　この世界観でムキムキマッチョラオウやりやがる奴がトキ以外の何者だっていうんだよ!!」
ほぼ狂乱状態である。
それはそうだ。
先程までいた妖精さんたちが拳の一撃で消し飛び、その拳の持ち主がリアルラオウ。

いやＶＲ越しだからバーチャルラオウ。
なんだこれは地獄か？
「ふむ、気付かれた以上仕方がない。そうだトキだ」
「早いよもっとあがけよなんであっさり認めちゃうかなあああ！」
頭を抱えてうなるキリト。
その様子を見て狼狽するリーファ。
「あ、あの……もしかして知り合い？」
「……認めたくないけど」
心底嫌そうな顔であった。
ラオウ――もとい中身トキのラオウは頷いている。
誰かこの空間壊せ。
「うむ。我はかつてＳＡＯ内でキリトとフレンドだったトキ、そして今現在ラオウだ」
「だろうなぁ……やっぱりなぁ……」
「そして、今現在ラオウとして独自勢力を保っている」
「なんだよこいつううう頭おかしいじゃねえかよおおおお!!」
どこから出てるんだこの声。
キリトは絶叫していた。

「どこにも属さない勢力、ラオウ……!?　まさか実在していただなんて……！」
「なんだよそれえええおかしいの俺みたいじゃねぇかあああ!!!」
キリっとした顔で言うリーファにもツッコミを入れるキリト。
最早元のキャラを思い出せない。
いやそんなことはないのだが。
「とにかく！　なんでこんな場所にいるんだ!?」
「知れたこと。ＳＡＯの騒動の現況を断ち切る為よ」
「あ、まだＲＰするんだ……」
肩を落としているキリトであるが、その中で色々と考えていた。
まさか、もしかしてこいつも何かを知っているのか。
そう考えて、もはや何を思えばいいのかわからなくなって諦めたキリトであった。
こいつなら何をやってもおかしくないわ。
「そして、我は知った。この世界がおかしいことに」
「……そうだな」
おかしいのはお前だと言いたくなったキリトだが、口を無理矢理閉じた。
ラオウトキが語るには以下略。
基本的にキリトが辿り着いた想定そのものであった。

というかこれほど一致するのは逆に怖い。
何かあるのではないか。
そう思わないでもないが、逆にあんまり知りたくもなかった。
「往こう、我が先導する」
「……ねえ、大丈夫なのこの人?」
「……多分」
若干不安であった。

「北斗剛掌波!!!」
暫くして。
ドーム内で現れる天使もどきをビームで撃破していくラオウトキ。
いやあれなんだよ拳じゃねーじゃねーかと言いたいが我慢する。
それどころではないし。
とにかく最終関門を突破したキリトは、なんかよくわからないおっさんとの最終決戦へと向かうのだった――

「はぁん！」
「ぎゃあああぁ!?!?!」

なおキリトに襲い掛かった本物の方のおっさんはトキ（本物）がボッコボコにした。

ガンゲイル・オンライン編!!!!
「俺の名を言ってみろぉ！」
「ジャギギギギギ!!」
キリトは切れた。
なりふり構っていられなかった。
こいつは今殺さなければならない。
いや殺さないけれど。
トーナメントに殴り込み、ショットガンと己の肉体だけで勝ち進むジャギ（中身トキ）。
それを見ながら顎をあんぐりさせるキリト。
いやもう、あの動きはもうトキしかできないじゃん。

わかっちゃうじゃん。
プレイヤースキルとかもう関係ないじゃん。
じゃんじゃん使って頭おかしくなりそうなキリトであった。
「ねえキリト……」
「知らない」
「えっ」
「あんな奴知らない……！」
ほぼ悲鳴である。
しかし、改めて見るとプレイングセンスがとびぬけている。
予測線を回避するのではなく、敵の筋肉の動きから察知して回避しているのではないかと疑わざるを得ない謎の回避速度。
というかなんだあれ。
俺でも真似できないぞ。
とにかく頭がおかしかった。
「こいつはどうだぁ！」
すると地面を掘り起こして巨大な丸太状の瓦礫で相手を殴り飛ばし、そのまま空中でボコボコにする。

いやなんだよあの挙動。
おかしいおかしい。
周囲の奴らも言ってる。
が、全世界放送されているのに修正もバグと発信されない以上、あれは仕様なのだ。
「ひゃっはー！」
周囲がざわざわする。
あ、飛んでる。
キリトは考えるのを放棄した。

「てめえなんか知らねぇ！　ここで死ねぇい！」
「くっ」
ラフコフのメンバーだったであろう謎の男がジャギ（中身トキ）にボコボコにされ、トーナメントを撃沈する。
どこからともなく出現したドラム缶によってハメられて、マッチのようなもので引火させて爆破。
更にいつの間にか存在していたタンクに引火させ、更に炎上。
ラフコフ（仮）は焼け死んだ。

ＦＡＴＡＬ　Ｋ．Ｏ．（笑）

逃げようとした兄はトキが確保、弟はキリトが八つ当たり気味に殴り飛ばしてフィニッシュ。

勝ち申した。

リアルトキ

現実編!!!!!

「マジかよ!!!!」

なんと、トキはリアル世界でもトキだった。

驚愕の一言である。

「ふふふ、そう驚くな。私は私だ」

「だから驚いてるんだけどな」

「ははは」

しかもかなりの資産家であった。

嘘ついた。

超のつく資産家だった。

一生遊んで暮らせるだけのお金を持っているらしい。

「この身体を維持するのに必要なのだよ」

「どういうことだよ……」

キリトには理解できなかった。

いやまあ、目の前で林檎を片手でぐちゃぶしゅーされたら頷くしかないんだけども。
怖いし。
という感じでトキは色々な株を持っていて、それで生活をしているとかなんとか。
凄い男だった。
いや、元々濃い男だったが。
「……まあいいや」
キリトは考えるのをやめた。
さて、なぜこのような話をしているかというと。
今現在、キリトはアスナがリハビリの最中で暇していたのだった。
そして、そこへ偶然。
そう、偶然現れたトキが話しかけてきたのだった。
「あ、トキさんだ」
「え、マジか」
「わー本物もムキムキなんですねー」
アスナがリハビリから帰ってくると、トキを中心に輪ができた。
キリト的には微妙に不思議だが、やはり人気者である。
それもそのはずだ。

これだけのインパクトを持つ肉体と、それなりのイケメン。
そして資産がやばい。
これは狙われますわ。
「でも私はキリト君一筋だからね!!!」
「いきなり何なの!?」
「牽制！」
アスナも最近怪しい。
いや、おかしいというべきか。
なんか毒されてないですか？
あ、気のせいですかそうですか。
それはともかく。
キリトは時々トキと手合わせをしている。
しかもリアルでだ。
何故かというと、自分の筋力不足やらなにやらが気になってきたからである。
断じて北斗の拳の真似をしたいわけではない。
「はぁ！」
「はっ」

なんと、キリトは二刀流専用の竹刀で、トキはトキだった。
いや素手だった。
それなのに全ての攻撃は逸らされ、弾かれ、飛ばされる。
そして身体の中心にがっつり当て身。
痛いという前にぶっ飛ばされるキリト。
「ぐぇー……」
いや本当に何者なんだこいつ。
年上だからこいつって呼ぶのは駄目なんだろうけど。
そう思ったキリトだったが、トキはトキなのでこいつ呼びでいいかなとか思ったりしている。
「お疲れ様です」
ふわり、とキリトの頭にタオルが載せられる。
冷たい。
水で冷えたタオルである。
「ユリア……」
「百合です。いい加減覚えてください」
そして、そのタオルを渡してくれたのはトキの彼女……のようなものらしい。

名前は百合。
苗字は知らない。
だがとてつもない美人であることだけは分かる。
アスナとトントンかな。
キリトも中々に惚気ている。
今はトキの住まいにお邪魔している。
鍛錬部屋としてかなり広い畳の部屋があるので、そこを借りて手合わせをしていたのだ。
そんなだだっ広い住まいに、トキは百合さんと二人きりで過ごしているという。
おお、えっち。
キリトは妄想をかき消して竹刀をもう一度手に取った。
「もう一度お願いします」
「ああ、いいだろう。まだ秘孔は突き切っていない」
突き切ったら死ぬんですが。
内心でツッコミを入れながら、キリトはトキへと切り込んでいった。

マザーズロザリオ編!!!!!

「ぜっけん……？」
キリトが負けたという話を聞き、アスナが驚く。
それはそうだ。
キリトが負ける相手などそれこそトキくらいしかいない。
いやまあ、最近だとトキの歩法を齧り始めたアスナに負けそうなのだが。
「とにかく！　その絶剣って子と戦ってみる！」
アスナは決意した。
ここで勝ってキリトのリベンジ、そして褒めてもらうのだ。
でへへへとゆるゆるな笑みを浮かべているアスナ。
どうしてそうなるのかちょっとよくわからない。
「あはは……」
アスナの娘を自称するユイは乾いた笑みを浮かべていた。
最近、ママがおかしいんです。
そう相談する姿が良く見られている。

「とにかく！　私が絶剣を倒します！」

「お、女の子……！」

アスナは戦慄した。

まさか、キリトが女の子だからと手加減したのでは。

そう思ったりもしたが、それもまあないなと考え直す。

だって私の方が可愛いもん！

どや顔である。

「と、とにかく勝負よ！」

顔が赤いまま戦いを挑むアスナ。

その構えは既に戦場のそれだった。

「うん、いいよ」

即座にデュエルモードに移行、戦闘が始まった。

先手はアスナだった。

トキの手ほどきが異常に噛み合った彼女は、無想流舞の一部を使いこなせるようになったのだ。

化け物っすね。

「はやっ」
「そっちが遅いのよ!」
神速の突き。
真下から放たれたそれをギリギリのところで避ける絶剣。
マジかよワンキル狙いか。
変なことまで教え込んでないだろうなトキ。
そんなことをちょっと遠くから見ていたキリトが思った。
しかし、戦況は平行線
アスナが常時攻めている印象だったが、それでも攻めきれない。
どうしてもあと一歩が足りないのだ。
「あの世界にあいつがいたら、俺は二刀流を持ってなかったよ（うろ覚え）」
そんなことを言っていたのを思い出したアスナ。
だがまあ、それはそれ。
別に二刀流がなくてもキリトを好きになったからだ。
惚気てる場合ではない。
と、そこまで考えていたアスナが距離をとった。
絶剣の雰囲気が変わったのだ。

必殺技を出すつもりのようだ。
多分だけど。
勘だけど。
アスナの勘はよく当たるのだった。
「それじゃあ、奥の手出すしかないか……」
アスナも自身の愛剣を構える。
彼女にも必殺技がある。
まあそれもトキ直伝の呼吸法、移動法、技術をパクりもとい参考にしたものだが。
お互いが目線を合わせ、激突。
両者の突きも激突し、火花が散る。
2発目3発目と突きを繰り出す絶剣に対して、アスナはその全てを逸らし、弾き、散らした。
「あ、あれは!?」
「し、知っているのかキリト!?」
キリトと一緒に観戦していたエギルが驚く。
というか顔が劇画タッチになっている。
「北斗有情断迅拳……!」

トキが使用した北斗神拳の奥義である。
襲いかかってきたたくさんの敵の間を駆け抜け、敵全員の秘孔を突く技である。
有情拳の名の通り、相手は天国を感じながら爆散する！」
キリトの説明に周囲の観客も慄く。
いつの間にか北斗の拳通になってしまったキリト。
悲しいね……とか思いながら、アスナはそのまま技を繰り出し続ける。
突きを逸らし、弾き、散らす。
その動きはまるで流水のよう。
そして決して身体に剣を触れさせることはない。
最後と思われる突きを絶剣が放ち、アスナがそれを弾き飛ばし、首に愛剣をつきつける。
今の動き、全てがゲーム内のアシストがない自力の技である。
化け物じゃん。
「私の勝ちね」
「うん、ボクの負けだ」
わっと沸く観客。
連戦連勝の絶剣に勝ったのだ。

その興奮は冷めない。
そして、アスナも力を抜いて剣をしまう。
思い切り息を吐いて脱力する。
あれだけアシストなしで動くのだ。
かなり疲労した。
アスナがその場に座り込んでいるのを見て、絶剣がにっこりと笑う。
「やっと見つけた」

「このＰＴで、エリアボス撃破するの……!?」
「うん」
驚くアスナに、絶剣――ユウキは頷いた。
アスナの驚きは当然であった。
アインクラッドのボスは強敵だ。
トッププレイヤーが束になってかかってようやく勝てるような存在なのだ。
それを、アスナを入れた７人で倒すなんて……いや、倒したけど、前に。
アスナは頭の中に無双するトキの姿を思い浮かべて消した。
あれはある種の悪夢だ。

キリトにとってはだが。
「とにかく！」
「は、はい」
「作戦、練るわよ」
「！」
ハイタッチをするスリーピング・ナイツの面々。
アスナはその様子を見て、笑みを浮かべた。
「しゃあおらあああああああ！　我流！　北斗！　砕覇剣!!!」
アスナの必殺技が炸裂！
見事にエリアボスは頭をぶっ飛ばされてＯＫ！
見事に勝利をしたのだった……！

マザーズロザリオ編2 !!!!!!!

「……むう」

彼女――ユウキは憂鬱だった。

アスナと仲良くなり、色んなことを教えてもらったりなんだりをした。

学校にも行けたし、友達もたくさんできた。

だけど、もう、時間がなかった。

病気が進行し、もう身体を動かすことができない。

しかし、ああしかし。

最後に、アスナに伝えなくちゃいけないことがある。

ユウキはそう思って、気力を限界まで振り絞ってアスナにメールを飛ばした。

「……思い、伝わったよ……」

アスナは消えていくユウキを見ながら言葉を漏らした。

悲しい、とても悲しかった。

それでも、心に残る何かがあった。

数日後、母との対話（ｎｏｔ　物理）をして打ち解けたアスナがユウキの墓参りにやってきた。
お墓ではないが。
彼女の家があった場所に、花をささげに来たのだ。
ここの所有権はなんとトキが買い取った。
即金で払ったらしい。
流石資産家。
どこからそんな金が出るのだろうか。
アスナの家も大概なのだが。
「あ……」
アスナは思いに耽っていて、先客の存在に気付かなかった。
トキだった。
トキが祈りを捧げていたのである。
「……」
「……ああ、アスナ君か」
気付かなかったのはお互い様であったようだ。

トキは軽く会釈し、そのまま歩いて行ってしまった。

「……」

アスナは持ってきた花を供えて、その場で祈りをささげた。

どうか安らかに。

楽しい記憶を持って。

そんな願いを込めて。

「……さて！」

気分を切り替える。

ずっと暗い気持ちでいたら笑われる。

だからそう、私は元気でいるのだ。

アスナはそう考えて歩き出した。

「っしゃぁ！　一本取ったどー!!」

しかしこれは元気過ぎでは？

キリトはそう思った。

場所はトキ家。

そのアスナのお相手はキリトである。

何度も何度も打ち合って、漸く一勝だ。
それはそうだ。
キリトは剣道の基本も学んでいるし、アインクラッドでの記憶も用いて特殊な戦い方ができる。
一方アスナはアインクラッドでの記憶だけ、剣術に関してはそれ以外の知識はなかった。
そう、なかったのだが……。
「ふむ、流石アスナ君だな」
「はい師匠！」
「師匠はいらない」
気付けばトキの手ほどきを受けていた。
いや、勝手に技術を盗んでいたというか。
とにかく凄いことをやってのけていたのだった。
「いやまあ、俺の頭が固いだけなんだろうけど」
どうにも自分には北斗神拳の動きは合わない。
そう一度思ってしまったのが悪いのか、その現状は未だに続いている。
いやまあ、だからなんだというわけではないのだけど。

「？　どうしたの？」
「なんでもないよ」
アスナはあの一件から逞しくなった。
いや、元々逞しかったけど。
キリトは色々なことを思い返した。
「……」
変なことまで思い出してしまった。
頭を振って思考を追いやり、別のことを考える。
「タオルです」
「あ、ありがとうございます、百合さん」
ぺこりと頭を下げて一瞬で消える百合。
キリトでは見逃してしまうその動きを、アスナは見切っているらしい。
だんだん化け物じみてきたな。
一瞬彼女が怖くなった。
まあすぐ慣れたけど。
「そういえば、あの人は百合さんなんですか？　それともユリアさんなんですか？」
ふと、疑問をぶつける。

毎回毎回あの問答を繰り返すのだ。
気にならないと言ったら嘘になる。
その質問に、トキは何でもないかのように答える。
いや、実際なんでもないのだろう。
彼にとってはだが。
「彼女は孤児だ」
「……！」
クッソ重い……！
キリトは早速後悔した。
「それを拾って育てた」
「拾って……？」
ちょっと、理解が、おいつかない。
キリトは混乱していた。
ついでにアスナも混乱していた。
「まあ、細かい話はいいだろう。彼女は彼女だ」
「ええと……」
「私の自慢の娘だ」

どや顔であった。
どういうことなのか。
すると何もない所からお盆が飛んできた。
壁を砕くかというその速度、そんなお盆を片手で受け止めるトキ。
「娘ではありません」
「そうだったか？　ユリア」
「百合です」
いつもの会話である。
トキは普段と同じ、落ち着いた顔だ。
百合は何だか顔が赤い。
娘扱いをされて怒ったりしたのだろうか。
「キリト君は鈍感だね」
「???」
「気にしなくていいよ」
不思議なアスナである。

第６話

「ユリア」
「百合です。覚えてください」
いつも通りのやり取りの後で、今日から私はＳＡＯに囚われる。
準備は万全。
百合を適当にその辺に追いやり、ナーヴギアに手を伸ばす。
なんだかんだ言って楽しみである部分もある。
βテスターには選ばれなかったからだ。
それはそれとして緊張するが。
「では始める。ユリア、家のことは任せたぞ」
「百合です、間違えないでください」
ユリアと名付けたはずなのに百合を名乗る謎の女。
それが私の相棒兼相方のユリアである。
とりあえず、彼女に任せれば安心だろう。
何を考えているのかは微妙にわからないが、私の不利益になることはしないだろう。

多分。
というわけでいざログイン。
さあ、ソードアートオンラインの世界だ。

「ふむ」
スッ……と拳を突き出すとゴブリンがぐちゃりと潰れた。
リアル筋力による補正だろうか。
とにかく鋭い一撃を繰り出した結果がこれである。
装備は既に売った。
重い物は邪魔だ。
とりあえず素手でどこまで行けるかを知りたかったのでゴリゴリ殴ってみる。
すると、どこまでも行けてしまった。
何だかスキルツリーがどんどんと伸びて行って、＃$、％＆ＰＹという欄が見つかった。
折角なので選んだ結果、その項目が変化した。
そう……北斗神拳だ。

「これが特典か……？」
多分そう。
脳裏に何かがよぎる。
気のせいかもしれないが。
もしかしたら普通にただのバグか、もしくはカヤバーンや開発スタッフが気まぐれで入れたデータリソースかもしれない。
まあいいか。
とりあえず楽しそうなのでぽちり。
以降、このスキルを育てていくことを誓います。
しゃきーん。

気付けばトッププレイヤーと言われるようになっていた。
おかしい。
もっと目立たないように行くつもりだったのに。
……無理か。
ちょっとトキになった結果楽しすぎた。
まあ元々トキのような姿だったが。

「ふっはっゆくぞっ！」
このゲーム、頑張れば簡単に上限突破できるのは知っているので。
頑張った結果、無想流舞もこなせるようになった。
目まぐるしく変わる景色に慣れるまでに時間がかかったが、今は余裕。
なので。
「ゆくぞっ！　ゆくぞっ！　ゆくぞっ！」
無想流舞を連打することも可能……！
ボキボキボキと砕けていくボーンゴーレムＭａｒｋ１２２。
「またつまらぬものを殴ってしまった……」
いやまあ、あれは通称カンチョーなのだが。
とりあえず今日の日課は終了。
最上層での鍛錬はいつも刺激的である。
「さて……」
気付くと周りには謎のプレイヤーたちが。
そのカーソルはオレンジ。
いわゆる違反行為を犯した者たちだ。
「ふむ……」

珍しいこともあるものだ。
本来であれば低層でＰＫ行為に勤しむであろう集団が、このようなところで集団でいるとは。
予想外の出来事である。
しかも狙いが自分。
それこそ不明である。
確かに最近オレンジプレイヤーを改心させたが……あ。
それか。
「死ね」
特に何の感傷もないような台詞だった。
そしてその声と反して的確な攻撃。
確実に殺すつもりのようだ。
「ふっ」
「なにっ!?」
しかし、わざわざ見える攻撃を喰らってやるほど私も善人ではない。
ギリギリのところで避けて、その男の顔面に裏拳を叩きつける。
そして突き、蹴り、空中で連続突き、そしてボコボコにしてＫＯ。

あわれ男Ａは瀕死になり、スタンもついて動けなくなった。
「くっ！」
「こんなに強いなんて聞いてないぞ！」
そしてその一瞬で力量差がわかったのか、オレンジプレイヤーたちは散り散りになっていった。
スタン状態の男も担がれて運ばれた。
「……」
しかし。
あの時改心したオレンジプレイヤーはどうしたのだろうか。
殺されてしまったのだろうか。
もしくは監禁でもされているのだろうか。
わからない。
わからないが、まあ行くか。
私は即座にその散り散りになったプレイヤーたちの中で、動きの遅い奴を狙って追いかけることにした。
「はぁーん！」

「ぐえー!?」
門番らしき奴らを蹴散らし、アジトっぽいところを襲撃する。
すると、背後から続々とプレイヤーが現れる。
カーソルは普通の色。
人数はかなりのものだった。
「何をしている!?」
「こちらのセリフだ」
「これは大規模掃討作戦なんだぞ！」
「私は私怨でここまで来た」
「逃がしたらどうするつもりだ！」
どうやらオレンジプレイヤーを倒すために人間をたくさんあつめたようだ。
しかし、話してみたがなんか張りつめている。
それもそうか。
「私は行く」
とはいえ私が退く理由にはならない。
他のプレイヤーには悪いが、先行させてもらおう。
「北斗！　有情断迅拳!!」

「ひきゃあ??」
「あへあえあ!!」
がちゃがちゃと鳴る鎧をすり抜けるように秘孔を突いていく。
いや、本当に秘孔なのかわからないが。
なんだか流れるように突くと相手が爆散する。
だから多分秘孔突いてる。

奥に進むと、何やら牢屋っぽいところに辿り着いた。
そして、そこに改心させたプレイヤーが一人。
「あ……」
「待て、今助けよう」
鎖でつながれていたその人物を抱き上げ、鎖を素手で破壊する。
そして、その人物の恰好を見て色々と察する。
というかこの子、女だったのか。
「う、あ……」
「喋らなくていい」
そういう気分ではないだろう。

というわけで抱き抱えたまま疾走する。
他のプレイヤーと鉢合わせるわけにもいかない。
この子もオレンジプレイヤーだからだ。

「……」
「……」
自宅である。
そう、私はアインクラッド内にも自宅がある。
買ったのだ。
装備がいらないから。
「あの……」
「ふむ」
「ありがとう、ございます」
その子はぽつぽつと話し始めた。
彼女は彼氏の影響でＳＡＯを購入、プレイしてアインクラッドに囚われたのだという。
そして、最初にお遊びだと思っていた頃にＰＫをしてしまい、オレンジプレイヤーに

なってしまったということだった。
「そうか……」
「あの人は……死にました」
しかも誘った男は自殺したという。
なんという無責任。
許されざるよ。
しかし、どうしようか。
つい勢いで連れてきてしまったが、プランとか何もない。
ただまあ、放っておくのも夢見が悪い。
「落ち着くまでここにいるといい」
「え、あ……いいん、ですか？」
「乗り掛かった舟、という言葉がある」
「え……？」
「気にするな、ということだ」
通じなかったようだ。
ちょっと恥ずかしく思いながら、素材を取り出す。
料理をするのだ。

こういう時は美味しい物を食べるに限る。
「ちなみに私の料理スキルはマスターだ」
「???」
通じない。
この子、ノリが悪い……！
まあいいんだけど。

「それでは」
「い、いただきます」
はぐはぐと私が作った料理を食べる。
ちょっと嬉しい。
初めてユリアに料理を振舞ったのはいつだったか。
ユリアも適当な返事をしていたが、まあそれは置いておこう。
というかこの子、名前なんだろう。
今の今まで聞けなかったので、逆に聞きにくい。
仕方ない、この子が言い出すまで待つか……。

そんなこんなで一週間。
この子の名前を知らないまま時が過ぎた。
料理ははぐはぐと食べるし、元気になってきた。
そろそろ立ち直るだろうかと思ったが、未だに私が近づくと震えたりする。
まあ仕方ない。

『ありがとうございました』
そして、更に一週間が経過する手前で、彼女は出て行った。
結局名前はわからないままだった。
まあ、感謝されたからいいかなって。

バトルロイヤル編！

――――最強は誰だ。
そんな問いにキリトは答えた。
――――わからん！
というわけで戦うことになった。
とても頭の痛いことだが、キリトはその感覚をスルーした。
考えてる余裕はなかったからだ。
「はっ！　せいっ！　ゆくぞっ！　はぁん！」
「う、おおおおおおっ!!!!」
トキの怒涛の攻撃をギリギリで捌きながら、辺りを警戒する。
そう、これはバトルロイヤルなのだ。
絶対ここで攻撃が来る。
トキを無理矢理押しのけ、バックステップを行う。
すると元居た場所に矢が何本も刺さる。
シノンだ。

えぐいわ。

「ちぇりぁあああ！」

そして、トキに向かってアスナが突貫していた。

その速度は神速のごとく。

というかブレて見えない。

ヒーラーとはなんだったのか。

キリトは半身になって真後ろから斬りかかってくるリーファを確認し、蹴り飛ばす。

容赦ねぇなキリト。

そしてシノンがいると思われる茂みに向かってナイフを数本投げた。

投擲術だ。

隙が少ないので割と多用している。

「くっ！」

「甘い」

茂みから出てきたシノンをキリトは斬り伏せる。

一撃だった。

やっぱり容赦ねぇな。

「……きゅう」

アスナが撃沈しているのを確認し、キリトはトキに肉薄する。
動かれては勝ち目はない。
こちらから攻める必要があった。
とはいえ相手も防御がかなり得意だ。
というかどこに隙があるんだトキ。
反則である。
「うおおおおおっ!!!」
「ゆゆゆゆくぞっ!」
／←／←のような動きで迫ってくるトキ。
なんだその変態駆動。
キリトは頭痛を抑えながら迎撃する。
この時点で負けは確定しているようなものだった。
しかし、キリトにも意地があった。
そう、男だからだ。

というわけで玉砕覚悟でトキに突撃したのだった――――

「お疲れ様」
「ぐえー」
見事に撃沈したキリト。
トキはみんなにアイスクリームを奢っていた。
悔しいがおいしい。
流石ハーゲン○ッツ。
しかし……とキリトは考える。
どうやったらここまで鍛え上げられるのだろうか、と思ったのだ。
トキの身体能力は異常と言ってもいい。
それも人類の上限を突破していると見て間違いがないほどだ。
それなのに、一向に有名にならない。
いや、なるつもりがないのか。
そんなことはないか。
一瞬で否定するキリト。
じゃなかったらＴＯＫＩ☆ＴＵＢＥとかやらないし。
とはいえ、この身体能力ならば他にも色々なことで活躍できそうなものだ。
そう思って聞いたが。

「ふふふ、暗殺拳は密かに生きるのみ……」

と言って笑うだけ。

いやだったらＴＯＫＩ☆ＴＵＢＥはなんだよとツッコミを入れたがスルーされた。

このやろう、いつか勝ってやる。

キリトはそう決意した。

ダブルデート編!!

「はえ?」
「だから、デートしましょう!」
唐突に巻き起こったアスナのデート熱。
それがキリトを外に引っ張り出した。
今からちょっとログインしようと思ってたんだがな―。
とか思ってるキリトはもげろ。
「とはいえ、私達が一緒に行く必要はないとは思うが」
「……」
「いいんです!　逃げられないように保険です」
「誰が逃げるんだよ……」
お前だキリト。
ともかく。
今回のデートはダブルデートだ。
アスナキリトペアとトキ百合ペアだ。

全く関係ないが、トキ百合とかいう字面、度し難い何かに思えてしまう。
全く関係ないが。
「というわけで、今日のデートコースはこちらです!!!!!!!」
「なんかアスナがたまに遠く感じるよ……」
激熱のデートコース！　と言って紹介したコースは、最近流行り始めた遊園地を一周するものだった。
ポップでキュートな要素はあんまりなく、どちらかというとクールな印象のアトラクション群。
キリト、正直好みです。
ということでうろうろと一緒に回ることになった。
「ふむ。ユリアも中々に楽しそうだ」
「百合です」
「そうだったか」
苦笑しつつ、先導する百合についていくトキ。
思えば中々にいいペアである。
もしかして付き合っているのだろうか。
キリトはそう思った。

「……」
「なんだその怖い顔」
「キリト君は鈍感だねー」
甚だ遺憾である。

ともかく、キリトも中々に楽しんだデートもそろそろ終盤である。
最後のコースは観覧車だ。
定番と言えば定番だ。
「キリト君、今日は楽しかった？」
「ああ、勿論だ」
これはキリトの本音である。
突然の提案であったが、アスナとデートをして楽しくないわけがない。
そんな感じのことを言うキリトであった。
天然かっ！
「……とにかく！　今日はデートだけじゃないのよ！」
顔を赤くしながらびしっと言うアスナ。
デートだけじゃないとは一体……？　とキリトが首を傾げていると、アスナが隣のゴ

ンドラを指差す。
そこには、トキと百合のペアが一緒になって座っていた。
「あの２人の観察よ……！」
「なるほど……」
キリトも結構興味があった。
トキの知り合いで、一定以上仲のいい相手と言えば百合以外いない。
いや、いるにいるらしいが、今まで見ていない。
そして、そんな相手の知らない顔を知りたい。
そう思っていたアスナである。
「私が思うにあの２人、デートとかしないでしょう？　だからいっそのことこっちから誘えばアクションを起こすんじゃないかなって」
「そうなのか」
「そうなのよ」
よくわからないキリトであった。
アスナとキリトはゴンドラに揺られながらもう一方のペアを観察する。
アスナ的には実質密室であるこの空間ならば、２人とも素を晒すのではないかと思っているのだった。

しかし。
「……う、動きがない！」
「そうだな」
「まさかこのまま何も起きないままとか!?」
「いやまあ、それはそれでよくないか？」
「よくない！」
「駄目なのか」
「駄目です！」
駄目らしい。
アスナの勢いに押されるキリト。
仕方なく観察を再開する。
しかし。
このまま何も進展がないまま1周してしまう。
このままゴンドラ止まれ！　とアスナが叫ぶ。
よさないか！　と叫ぶキリト。
すると。
少しだけゴンドラが揺れた。

「あっ」
そして、その揺れに合わせて、百合がトキに寄りかかった。
「おおっ!」
「アスナ……」
ちょっとアスナが遠い。
キリトはそう思った。
しかし、そのままアスナが思うような事件（?）が起こることはなく、1周が終了してしまった。
「私は不完全燃焼です」
「はいはい」
アスナはぷんすかしながらも、キリトの腕をとってご機嫌である。
どっちだ。
すると、トキを置いて百合が2人に近寄ってきた。
「どうしたの?」
「あの……ありがとうございます」
「ふふっ……どういたしまして!」
アスナは満面の笑みでゴロゴロし始めた。

猫かっ！

キリトはそう思いつつも口に出さなかった。

「ところで百合さん年齢的には中学生くらいにしか見えないんだけど大丈夫なの？」

「愛は世界を救うのよ！」

「確かに」

そこじゃないんだわキリト君。

アリシゼーション編!!!!!!!!!

「アーーーーーーータタタタタタタタ!!」

連打。

見えないほど早い拳が巨大な木を打つ。

「オワッタァ!!!」

ずどぉん……という音とともに、倒れる巨大な木。

「ええー……」

「こうなると思ったんだよなぁ!!」

キリト、ケンシロウと出会う!!!

それは少し前の話。

キリトがとある世界に放り込まれた直後の話。

「み……水……」

「……」

「た、大変だ！」

キリトはユージオという少年と出会い、一緒になって巨大な木を切ろうとしていた。
するとそこに謎の男が現れたのだった！
というかケンシロウじゃん。
キリトは頭を抱えた。
「助けなくちゃ！」
「そうだよねぇぇぇぇぇ普通助けちゃうよねぇぇぇ!!!!!」
「一体どうしたんだキリト!?」
絶対トキの知り合いか関係者じゃん。
キリトは頭を抱えつつ、仕方なく介抱することになった。
「助かった。俺の名はケンシロウ」
「はい」
「この拳でお前たちの力になろう」

そして冒頭に戻る。
お分かりいただけただろうか。
アリスちゃん、捕まってない！
そして、手に入るはずだった剣もない！

ないない状態で騎士になるために冒険に出ることになったのだ!!!!

「大丈夫かこれ……」

こちらのセリフである。

「北斗っ……百裂拳!!!」
「あべし!?」
「ひでぶ!?」
大丈夫だった。
ケンシロウの拳は剣になど負けなかったのである。
「手加減ができるんだ……」
「当然だ。人間をわざわざ殺すことはない」
「凄い、ケンシロウの存在が矛盾してる気がしてならない」
「はい師匠！　こんな感じですか！」
「お願い師匠！　私にも教えて！」
カオス。

剣術ではなく北斗神拳を学ぶアリスとユージオ。
やべー奴や。

あ、キリト達の後輩に悪いことしようとした貴族はケンシロウの残悔積歩拳によって地面のシミになりました。

ちなみに。
「騎士になれるんだ!?」
「キリトよ……」
ケンシロウはふっと神妙な顔をした。
……と思ったら普通に話し始めた。
「剣でも、秘孔は突ける」
死角とかなかったっすね北斗神拳。

時は流れて。

「ふはははは！　ケンシロウ！　暴力は良いぞ！」
「シン！」
「ははははは！　レイよ、今こそ仕留めてやるぞ！」
「ユダ……！」
「ふはは！　この聖帝、引かぬ、媚びぬ、顧みぬ！」
「くっ、アリス！」
「ええ、こんなところで負けるわけにはいかない……！」

暗黒大陸を支配していたキングたちが攻め込んできたので戦うことになった。
長く激しい戦い、傷つく仲間たち、そして友情による勝利。
彼らはついに悪の親玉を拳によって蹴散らしたのだった……！
「ソードスキル使ってたのは俺だけかっ！」
「ソードスキル、岩山両斬波!!!!!!!!」
「素手じゃん!!!」

「これ、ただの北斗の拳じゃん……」

現世へ復活したキリトの最初の一言がそれであった。

ゼロ魔編！

気付けば異世界へと飛ばされていたトキ！
その眼前には少女の唇！
つまりはリバサセッカツである。
「いったあああああああああい!?」
カウンターが入って吹き飛ばされる少女。
痛いだけで済んでる辺り何かおかしい。
おかしいが、友人にキリトがいるトキにとってそれは日常だった。
「ふむ……」
辺りを見渡したトキは、自身の置かれている状況を把握した。
え？
マジで？
とりあえず把握したトキは、即座に先程吹き飛ばした少女を追い越して壁に衝突する前に受け止めた。
「え？　あれ？　今さっきあっちに……？」

「馬鹿な、あれは魔法……?!」
辺りがざわざわし始めたが、トキは無視した。
そして即座に抱き抱えた少女の方を見る。
すると激痛が左手に。
見れば少女がそこに噛みついているではないか。
「もがもがもが」
しかもなんか喋ってる。
呆気に取られている間に、その少女は何かを完成させたのだった。

「わたしの物になれー!」

「ふむ」
「あのー」
暫く経って。
トキは更に現状を把握した。
なんか知らないが召喚されたこと。
なんか知らないが少女がそれを行ったこと。

そして、今のところ少女が自身をこの場につないでいるということを。
「なにかお困りかなーとか、なんとか……思ったりなんだりしちゃったりなんだけど……？」
あははーなどと言っているのは、木に逆さ吊りにされている少女、ルイズであった。
スカートの中身は出ないように必死で抑えている。
「いや、心配はいらない。この世界でも私は生きていけるだろう」
「え？」
「故にここを発つ」
「ちょ、それは困るわ！」
ルイズはスカートの中身が見えるのも構わずにトキの頭を掴んだ。
必死であった。
「ちょっとだけでいいの！　ここにいて！　わたしの言うこと聞きなさいよー!!」
「……」
「聞いてください!!」
ルイズがここまで必死なのは理由があった。
この平民らしき男の能力だ。
それがもう凄まじい。

あの一瞬で自分を吹き飛ばし、更に吹っ飛んだ先で拾われ、更に激痛に苛まれる自分を救ってくれた。
まあ、激痛はトキがやったことだったのでトントンかもしれないとか思ったが。
それはともかく。
この男の力は使えるのだ。
魔法じゃないかもしれない。
しかし、魔法に見えなくはない。
もしかしたら。
もしかしたらゼロのルイズじゃなくなるかもしれない。
そう思ったら、藁にもすがりたくなったのである。

「わたしにその、ホクトシンケンを教えてください!!!」
「駄目だ」
「うわーん!!!」

逆さ吊りのルイズは泣いた。

〜〜

「ハァン！」
「ひえ」
手刀で一閃。
青銅の像の首が消し飛んだ。
いや、正確には遥か上空へと吹き飛んだのだが、些細な違いだ。
その光景に、術者は気絶してしまい、青銅の像は消えてしまったのだから。

沸き立つ平民。
震えあがる貴族。
それもそうだ。
平民たちにとってメイジを倒せる存在は同じメイジだけだと思っていたからだ。
それは、メイジたる貴族も一緒だ。
それが覆された。
しかも圧倒的差である。
そしてそれは、その男を呼び出したルイズの評価にもつながったのであった。

まあ簡単に言うと痴話喧嘩であった。
それに巻き込まれた平民のシエスタを庇ったトキが、その痴話喧嘩のギーシュ（違います）をやっつけたというだけのことである。

トキを使役しているルイズも同じ力が使えるのかもしれない。
そういう噂が立つのも仕方のないことだ。
そして、その噂を聞いて、黙って居られなかったのは当の本人だった。
そう、もしかしたら。
もしかしたらゼロのルイズを脱却できるかもしれない。
そう思い、渋々ながらトキに教えを乞うことにしたのだった……。

〜〜

それが先程までの事。
そして逆さ吊りのルイズが泣き出したのが今である。
ちなみにトキは既にこの学園の中で生活圏を獲得している。

平民のみんなに話を聞いてもらい、いくらかの仕事を回してもらうことで生活できるようになっているのである。
そして今では英雄扱いである。
もはや生活に不安はなかった。
「……」
ルイズも気付いている。
自身がトキを縛るのは、既にルーンだけであることに。
だからこそ、どうにかして自分と一緒にいてもらわないと困るのだ。
だって、そうじゃなければ使い魔にすら逃げられたメイジとして後世に名を残しかねない。
それは嫌だ。
嫌というか、無理だ。
泣いちゃう。
というか泣いた。
というわけで、もはやなりふり構っていられなかった。
どうせゼロだ。
何かを失うわけじゃない。

いや失いきった結果がゼロなので、かなり悲しい現実を直視してしまったが。

とにかく。

ルイズは頑張って彼女なりに譲歩しようとしていたのである。

うまくいっていないが。

「！　そ、そうだ！　この学園の近くに町があるわ！　そこに案内してあげる！」

「ふむ」

「そこで色々買ってあげるわ！　服でも装飾品でもなんでも！」

「……」

「だから……」

色々と話していたら、なんだか悲しくなってきた。

平民に、それもついこの間知り合ったばかりの奴に媚びている。

そんなみじめな自分が、心底嫌になりそうだった。

いや、最初から嫌だったのだ。

魔法が使えない、残念なルイズ。

魔法が使えない、ゼロのルイズ。

それが自分なのだ。

「う……うぅ……」
涙があふれる。
違う、そうじゃない。
今は泣いている場合じゃないのだ。
そんなことをしているくらいなら、トキを逃さない手を考えなくてはならない。
何かないのか。
あの力を逃さない方法は。
考えて考えて、結局わからないまま涙だけがあふれてくる。
「お願いします……助けてください……」
もう駄目だった。
ルイズはもう折れてしまいそうだった。
だけど、それでも。
ルイズは完全に折れてはいなかった。
折れることだけはなかったのだ。
まだ、ルイズのプライドは砕け切っていなかった。

信念は砕けていなかった。
それはきっと、彼女を優しく育ててくれた家族がいるからだ。
彼らを裏切ることだけは、したくなかったのである。

「……済まなかった」
「え……？」

そして、折れたのはトキだ。
ここまで言われて、ここまで乞われて、ここまで心情を吐露したルイズに絆されたとも言える。
トキも冷血漢ではない。
しかし、ルイズの感情を読み切れていなかったのだ。
どれだけ余裕があるのかもわからなかった故に、トキはルイズを試していたのだった。
その結果が逆さ吊りのまま号泣する少女である。
ルイズのギリギリ具合を把握し切れなかったトキの失態である。
「北斗神拳を教えるのはまだ無理だが、使い魔として暫くは生活しよう」

「あ……！」
ぱぁ、とルイズの顔が明るくなる。
まだ、というのはいずれはということだ。
ルイズはそう解釈した。
それに自分から離れるのも先送りになった。
ルイズは決意した。
その間に自分を主として、仕えるに値する主だと認めさせてやるのだと。
なんだかんだ自分が上にならないと気が済まないのだった。

「あと一言いいたいことがあるの」
「何だ？」
「下ろしてください」

ゼロ魔編!!

「どう！　凄いでしょう！　これがこのトリステインの城下町よ！」
むふーとでも形容するべきか、ルイズは自慢げだ。
確かにそうだ。
この時代の背景から考えればかなりの大きさである。
トキもなんとなくそれが理解できた。
「……む」
「ぐあああああ!?」
「ちょ、何!?」
辺りを見渡していたところで、スリにあいそうになったトキは、つい秘孔をついてしまった。
つい、で秘孔を。
やべー奴だ。
「な、なるほど。流石わたしの使い魔ね！」
軽く説明するとルイズはふんすと意気込んだ。

こいつを手放すわけにはいかない。
先程は失態を晒したが、ここで挽回してみせるのだ。

というわけでルイズはきょろきょろと見渡して武器屋を見つけ、入るのだった。
寂れている、というのが一目でわかる具合だった。
とはいえルイズは気にしない。
平民の使える武器くらい売っているだろうという判断だ。
「武器か」
「そうよ。貴方は強いけれど、武器を持っていればそれだけで威嚇になるでしょう？」
「道理だ。中々考えている」
よし、ポイントアップだ。
ルイズは内心でガッツポーズ。
その勢いのまま店主と話し始めるのだった。
「おや、貴族様がどうしてこのような寂れた武器屋に」
「客よ。わたしの従者に武器を持たせるの」
「はあ、でしたらこちらなんてどうでしょう」
取り出したのは綺麗な装飾が施された華美な大剣だった。

確かに質はいいのかもしれないが、それでもやはり武器としてはあまり使いたくない代物であった。

派手だし、中々いいんじゃないとルイズは考えたが、その前にトキの様子をうかがうことにした。

若干の苦手意識だ。

「確かにいい出来だ。多少重いが戦闘に足り得る性能は持っているように見える。だが戦いに使うには少々華美ではないか？」

「へぇ……」

店主の顔色が変わる。

先程までのどこかやる気のない様子から、いかつい職人の顔へと。

「あんた、そこそこ見る目があるみたいだな」

「主が優秀なのでね」

「そ、そうなのよ！」

わーこっちを立ててくれた！

ルイズは内心ちょっと嬉しかった。

店主が奥へ引っ込んで武器を探しに行く。

先程のはやはり見せるための武器なのだろう。

それでいてある程度の性能を持っていた。
「ルイズは中々やるんだな」
「そ、そうよ！　わたしは凄いんだから！」
褒められて満更でもないどころか嬉しい気持ちが溢れそうなルイズ。
目上の人に褒められることがそうそうないルイズである。
本人は否定するだろうが。
その感覚は推して知るべし。

「これが、あんたに合う武器だろうさ。確かめてみてくれ」
暫く待つと、店主がなにやらじゃらじゃらと持ってきた。
ルイズには何が何やらわからなかったが、トキには分かったようだった。
「暗器の類、になるな？」
「ほう、やっぱり分かるか」
「あんき？」
「人の目につきにくい武器のことだ」
ざっくりとした説明だが、そういうものもあるんだとルイズは納得した。
しかし、それでは困るのだ。

何故ならルイズは派手で格好いい武器を買ってあげて褒めてもらいたいからだ。
本人は否定するだろうが。
「……むむむ」
しかし、それでも何か言える空気ではない。
ふわふわとした気持ちでその辺を見渡すと、何故か惹かれる気配があった。
なんだろう、これかな。
ルイズが雑に束にしてある剣の入れ物に手を伸ばすと、そこから声が聞こえた。
「――――――おでれーた。『使い手』にそのご主人様か」
「っ!?」
突然、目の前から声がしたのだ。
驚いて飛び退いたが、その視線の先には誰もいない。
……いや、ルイズは気付いた。
ガシャンガシャンと音を鳴らす剣が一振り、そこにあった。
「筋肉の質から体のキレまで一流じゃねぇか。おい店主」
「わかってるよ。ちゃんとお客様だ」
「ちゃんとって……」
何やら値踏みされていたらしい。

ルイズはちょっと怒りそうになったが、今はそこそこ気分がいい。
許すことにした。
「剣を握ることもできるがぁ、真価は格闘か？　いや少し違ぇな」
「そこまで分かるのか」
「へっ。こちとら何年も生きてんだ。舐めてもらったら困る！」
何やら嬉しそうなトキ。
それに気付いたルイズは何だかもやっとした気持ちになった。
なったが、それが何なのかわからなかったのでそのままスルーした。
「店主。この剣はいくらになる？」
「新金貨で１００！　この暗器セットも付けて２００でどうだ！」
なんだかとんとん拍子ね……。
ルイズは若干不満だったが、それも仕方ないと思う気持ちもあった。
インテリジェンスソードが、汚いとはいえ新金貨で１００。
更にたくさん武器が貰えて２００。
考えてみればお得だと思う。
「買ったわ！」
「まいど！」

というわけで即決購入。
ふふん、これで決断力のあるところを見せて好感度アップよ！
……好感度アップって何!?
セルフツッコミができるようになったルイズであった。

「さあ帰るわよ……む」
「あらルイズ。こんなところで奇遇ね」
「ん」
はぁい、とでも言いそうな気軽さで声をかけてきたのはキュルケである。
不本意ながら、ルイズの級友である。
そしてその横にいる小さいのもタバサという同級生であった。
「な、何の用かしら？」
ルイズは何となく嫌な予感がしていた。
まあ数日前にトキに夜這いをかけた相手である。
あんまりいい感情は持っていないが。
「あなたが城下町に行くと聞いて、飛んできたのよ」
「奇遇って言ったじゃないの」

「気のせいよ」
悪びれもなく言うキュルケ。
隣のタバサは若干眠そうだ。
あくびを隠す様子もない。
「……で、あなたが買ったのはその剣？　ボロボロじゃない」
「いいのよ。インテリジェンスソードだし」
「へぇ……」
ルイズの台詞に興味ありげに呟くキュルケ。
それはそうだ。
今回は金貨１００枚で買えたが、本来であればかなりの金額を吹っ掛けられてもおかしくない代物である。
それをルイズが買ったのである。
気にならないと言ったら嘘になるのだった。
「……ツェルプストー、何か変なこと考えてるんじゃないでしょうね？」
「別に？　だけどあたしも気になるわね、そのインテリジェンスソード」
トキはあまりに戦闘力が高過ぎて色々と危ない橋だ。
そこに惚れこんではいるものの、積極的になりすぎるのもいけないことだと諭された

ので、今はちょっと引き気味で接しているのだった。
キュルケを知る周囲の人間からしてみればすわ天変地異かとでも言いたいようなそれであった。
実際ルイズは叫んだし。
「へっ！　見た目はボロだが俺はそうそう壊れたりしねぇ」
「本当に喋るのね」
「興味深い」
そして、先程まであくびをしていたタバサまで寄ってきた。
インテリジェンスソード、いい買い物だったわね。
ルイズはちょっと優越感に浸っていた。
それに、とルイズは暗器について喋るか悩んだ。
折角隠しやすい武器だ。
隠しておく方がいい気がした。
なので喋るのをやめた。
すると、トキが頭をポンととしてくれた。
なんだろう、父親にされた気分だ。
ほんわかしてしまう。

「というわけで、我らの拳が来てくれた!」
「おおー!」
帰還後、平民たちの控え室へと向かうトキをつけていたルイズ。
トキの歓迎され具合を見て驚いていたのだった。
「……凄いわね」
「ええ」
「……」
「……なんでいるの?」
そこには何故かキュルケまでいた。
ついでにその友人のタバサまで。
なんだか執心ね、とでも言いたかったが、黙った。
何か藪から蛇を出しそうだったからだ。
「そうなんですよ。今では英雄ですよ」
「あら」
少しすると、背後からトキが助けた少女が現れた。
確かシエスタだったか。

ルイズたちは彼女が持ってきた飲み物を受け取り、話を聞くことにした。
「先日助けてくれたのもありますし、毎日薪割などもやってくれています。本当に助かっているんですよ」
「いつの間に……」
トキの友好関係に驚きながらも、ルイズは納得もしていた。
やはり年上で、頭がいいのだろう。
自分ではできないようなことをやってのける。
少し羨ましい、と思ったところで頭を振って思考を散らした。
そうじゃないのだ。
自分はもっと上に向かいたい。
だって、そうしなくちゃ家族のみんなに顔向けできないからだ。
「まあ、わたしの使い魔がちゃんとやってるようでよかったわ」
それっぽく言い、ルイズはその場を去る。
明日も授業、でも最近周囲の視線がつらくない。
ルイズはそう思いながら自分の部屋へと帰るのだった。

ゼロ魔編!!!

「はっ……はっ……」
寝る少し前。
ルイズは軽くランニングをしていた。
「肉体は健康で良好だが、北斗神拳を伝授するならば少々足りない」
とのことなので、体を鍛えているのだった。
当然ではあるがトキには内緒である。
知られたら恥ずかしいし……と思っていたりする。
「はぁっ……はぁー……」
それと一緒に、魔法の練習もする。
未だに魔法が上達する気配はない。
ただちょっとずつ身体が健康になっていく気がするだけだ。
「――――っ」
詠唱、そして放つ。
ファイヤーボールの呪文を呟き、杖を振る。

しかし、何も起こらない。
……否、宝物庫の壁が爆発した。
「あ……」
どうしよう。
こんなところを見つかったら退学かもしれない。
そうなれば、本当に家族に顔向けできない。
「……っ何!?」
そうやって悩んでいると、轟音とともに大きな揺れが彼女を襲った。
そして目の前には巨大なゴーレム。
それが宝物庫を攻撃していた。
「やばっ……!」
まさか。
自分が空けた穴を狙っているのではないか。
見れば完全にそこを目掛けて拳を振り下ろしているではないか。
止めなくては。
なりふり構わずファイヤーボールの呪文を唱え、ゴーレムの腕を破壊しようとする。
爆発し、ゴーレムの腕が崩れ落ちるが、しかし即座に再生してしまう。

どうする。
どうしたらいい。
逃げる？
いや、そんなことはできない。
何故ならそう、貴族はそのような無様を晒せないからだ。
「ファイヤーボール！　ファイヤーボール!!」
何度でも、何度でも破壊すればいい。
殴りつける腕を破壊すれば、宝物庫の壁を破壊することはできないのだ。

そして、当然と言えば当然だが、邪魔をしてくる存在を見逃すことはない。
ゴーレムは振り返り、ルイズを見た。
否、見たのは恐らく上にいる誰かであり、ゴーレム自体は振り返っただけだろうが。
「……っ」
だが、逃げるわけにはいかなかった。
ゴーレムが何だ、こちとらメイジだ。
負けてたまるもんですか。
杖を構える。

しかし震える。
どうしても、震えを抑えることができなかった。
これは武者震いだろうか、いやただの恐怖か。
ルイズにはもはや判断できなかった。

「北斗砕破拳！」

そして、そこに割り込んできたトキをみて、急にへたり込んでしまった。

「済まない、遅れた」
「お、遅いわよぉ！」
トキの台詞に若干震えながらも応えるルイズ。
弱い所は見せたくないのだ。
ルイズは懸命に立とうとした。
とはいえ、それは無理であった。
何故ならルイズが立ち上がろうとした瞬間、ゴーレムが地面にたたきつけられたからである。

そう、先程の一撃でゴーレムは宙に浮いていたのである。
当然ゴーレムの上に登っていた誰かは地面に落ちていた。
「ゆくぞっ!」
トキはその人物目掛けて見えない速度で疾走する。
いや本当に見えない。
というか上に飛んだり下に落ちたりと頭おかしい挙動をしている。
本当に魔法使ってないの???
ルイズの疑問はもっともであった。
「くっ!」
「ふっ」
空中で両手で挟み込むような一撃を謎の人物は壁を作ることで防ぎ、爆発させて目くらましをした。
まあその衝撃を完全に受け止めて反射しちゃうのがトキであるが。
「ぐえっ!?」
「激流では勝てぬ……」
激流ってなんだよ。
ルイズの脳裏に一瞬そんな言葉が浮かんだが、スルー。

もう常識は通じないのだ。
そのまま壁コンに続くかと思ったところで、ゴーレムに飲み込まれて消えていく謎の人物。
それはそうだ。
あのゴーレムを作ったのはあの人物。
どんな風に動かすか、変形させるかは当人次第なのである。
このままでは逃げられてしまう。
ルイズはそう思って叫ぼうとした。

「我が兄の剛の拳」

すぐにビームが放たれてアゴが外れてしまったが。

「ちょ、今の魔法でしょ!?　何?!　何なの!?」
「あれは我が兄の拳、北斗剛掌波」
「拳って言っておきながらどう見ても魔法だったでしょ!?」
ちなみに放たれた先の森は十数メイルは消し飛んでいる。

やはり剛の拳よりストロングな柔の拳。
いや元々そんな感じだったが。
ゴーレムもこれで砕け散ったはず、そう思ったルイズだった。
しかし、ルイズの手の中に謎の紙片が。

『秘蔵の破壊の杖、確かに領収いたしました　土くれのフーケ』

「ちょっと……どうしてこんなに人が集まるわけ？」
「いいじゃない別に」
「……興味がある」
襲撃の翌日。
彼らは土くれのフーケ追撃隊を結成して動き出したのだった。
メンバーはルイズ、キュルケ、タバサ。
そしてトキであった。
そしてその従者的な扱いとして、ミスロングビル
この５人が、フーケが潜伏しているという小屋へと向かっているのだった。
「けれど、どうしてこのような場所にとどまっているのかしら？」

キュルケはそう呟く。
確かにそうだ、とルイズは同意する。
本来ならあの爆撃（ルイズはそう思っている）に乗じて逃げてしまえばいいのに、それをしないとは。
何か理由があるのだろうか。
「使い方が分からないとかかしら……？」
「まさか」
適当にルイズが考えた答えを、即座にタバサが否定する。
そんな行き当たりばったりなことを有名な土くれのフーケがするはずはない、ということだった。
「むう……」
「意見を言うのは自由さ」
ルイズの頭をポンとするトキ。
若干頬を赤らめるルイズだが、即座にそれを振り払う。
嫌と言うわけではないが、なんというかこう、恥ずかしい。
そんな感じである。
「それにだ」

ちらりと、トキが馬車の前の方を見る。
そこにはミスロングビルと馬しかいない。
ルイズは首を傾げる。
意図がつかめなかったのであった。
「……まあ、今は困るな」
そう言って、トキは喋るのをやめてしまった。
そこから始まるのは少女たちのガールズトーク。
ミスロングビルを巻き込んでのおしゃべり大会であった。

小さな小屋へと辿り着いたメンバーは、警戒しながらもゆっくりとその小屋へと近づいていく。
しんがりはトキとミスロングビルである。
火力面で優秀なキュルケと（爆発的な意味で）強力なルイズが前面に立っている。
ふたりがかって出た形である。
「ところで……」
トキはミスロングビルに語り掛ける。
距離は1メイルもない。

至近距離だ。
一撃で首を刎ねることすら可能だ。
「何でしょうか？」
ミスロングビルの額には汗。
呼吸も乱れている。
緊張しているのだ。
トキはそれほどの殺気を出しているのである。
「昨日の賊と呼吸、体格、歩幅、気配が似通った人物に心当たりがある」
ジリジリと近寄るトキ。
それと同じ距離を離すミスロングビル。
一触即発である。
「見つけたわ！」
ルイズが大きく声を上げる。
破壊の杖が見つかったようだ。
そして、それと同時にトキがミスロングビルに攻撃を仕掛けた。
「そう、貴女だ」
「チィッ！」

手刀の先端がミスロングビルの髪の毛を削り、吹き飛ばす。
超高速の振り下ろしであった。
それをミスロングビル――否、土くれのフーケは寸前のところで回避した。
回避しなければ、袈裟に斬られていた。
素手でそれをこなせる相手だということに、フーケは恐怖を抱きつつも即座に逃げ出すことにした。
「ゴーレム!」
周辺の地面を媒介にゴーレムを作り上げる。
サイズは極大。
わざとトキの足元の地面を使って足場を崩した。
「むっ」
トキは即座に追いかけようとしたが、ゴーレムの動きに気付き、即座に転身した。
そう、ゴーレムはルイズ達を狙ったのである。
いくらメイジでも、強大な質量を持った土を叩きつけられては死んでしまう。
トキはそう判断してルイズ達に迫る腕を斬り裂いたのだった。
「フン……甘いねぇ」
「生憎だが、これが性分だ」

十分に距離をとったフーケは、トキの動きを見ながらゴーレムで牽制する。
油断すれば死ぬ。
しかし、今攻撃をされてもルイズ達を道連れにはできる。
この状況で拮抗していた。

「ファイヤーボール！」
開幕はルイズのファイヤーボールだった。
爆発によって片足が爆発したゴーレムは倒れ、崩れた。
そこにキュルケとタバサの魔法が立て続けに襲い掛かる。
火炎に焼かれ、吹き飛んだゴーレムを盾にしながら、フーケはトキに狙いを定めて岩塊を繰り出す。
「激流を制するは静水……」
それを流れるようにはじき返すトキ。
どうやってるんだこれ。
謎である。
「くそっ！　でたらめな動きしやがって……！」
はじき返された岩塊を土くれに還し、今度はルイズたちの足元をゴーレムに作り替え

る。
トキを相手にするのは分が悪いと判断したのだろう。
足手まといになるであろうルイズたちに攻撃したのだ。
「タバサ!」
「乗って」
「ありがと!」
しかし、ゴーレムの腕が完成し、彼女たちを拘束する直前に、風竜に乗り込まれてしまった。
これでは手が出せない。
トキとの一騎打ちになった。
なってしまった。
「……」
「……」
距離は１０メイル。
この距離であればメイジが超有利なのだが、トキはその動きだけで優位を凌駕してくる。
というか青銅のゴーレム相手に手刀で首飛ばすとか化け物じゃないっすか。

フーケは自分の首も飛ぶのではないかと冷や汗が止まらない。
しかし、フーケに悠長にしている時間はない。
空中に飛び出した風竜が旋回して戻ってくるまであとわずか。
それまでに決着をつけなければ数的不利によって完全に負けてしまうだろう。
「ふっ！」
故に動いたのはフーケ。
ナイフを投擲し、トキへと肉薄する。
トキは目を見開くが、即座に対応する。
二指真空把で受け止め即座に投げ返したのだ。
「んなアホな!?」
驚き、しかしそれでも接近をやめないフーケ。
ギリギリのところでナイフを避け、そのまま沈むように倒れる。
すると、フーケの背後からゴーレムの拳が現れた。
トキの視界を遮りながら攻撃を加えるための一手だった。
「見事……！」
トキは賛辞し、跳躍した。
まるで見えないその軌道は、ゴーレムの腕の中心へと飛び込む形だった。

まさか自滅か、と一瞬だけ思ったフーケだが、即座に考えを改めた。
トキがそのような容赦をするはずがないからである。
「天翔百裂拳……!」
そう、トキは真正面からそのゴーレムの拳をぶっ壊したのだった。
目にも止まらぬ連撃。
その一発一発がゴーレムの拳を砕き、破壊したのだ。
「む、無理!　降参!」
そしてその勢いのまま秘孔と突く直前でフーケが両手を上げて降伏した。
フーケ討伐隊は、無事にフーケを捕縛することに成功したのだった。

「……ところで、破壊の杖ってどうやって使うんだい?」
「火炎放射器だな。燃料が切れている。もう使えない」
「そ、そんなぁ……」

トキフオギア

遠く離れた地に、男はいた。
何もなく、ただひたすらに歩いていた。
そして彼には、右腕がなかった。
かつて彼は誰かを守る為に腕を失った。
そして、その腕をなくしたことで、守れなかった命もあった。
その全てを、彼は記憶していた。
なんと役立たず。
なんと恥知らず。
この身はただの木偶の棒ではないか。
そう思い、彼はここまで辿り着いた。
誰もが足を踏み入れないであろう地を、彼は訪れたのだった。

彼の目前には、古びた右腕がひとつ。
否、それは義手であった。

それが祭壇の上に飾られていた。
あれは力だ。
彼は確信した。
きっと誰かを守ることのできる力なのだ。
故に手を伸ばす。
そして握りしめる。
それだけで彼には激痛が走った。
人には過ぎたるもの。
それはかつてこの地に存在した神、ヌァザの右腕であった。
しかし、彼は諦めなかった。
かつて一緒に暮らした隣人。
愛するべき誰か。
そして、これから救うことのできる命。
それらのために、彼は力を求めたのだ。

暫く経ち、彼には存在しなかったはずの右腕があった。
彼は腕の様子を確かめると、その場を立ち去る。

『汝の成すべきことを成すがいい』

こんな言葉が届いた。

彼の名はトキ。

否、かつての名を捨て、トキを名乗る偽りのトキであった。

彼女――立花響はため息をついた。

かつて出会った兄のような存在を思い出し、アンニュイな気持ちになったからである。

「響ー、またあの人のこと考えてるんでしょ？」

彼女の親友、小日向未来はその様子を見て仕方がなさそうな顔をしていた。

響の中で、その兄のような存在はとても大きいものだったからだ。

しかし、その兄は突如として姿を消した。

まるで最初からいなかったかのように。
「未来ぅー、あの人は今どこにいるんだろうー？」
「今は入学式の準備をした方がいいんじゃない？」
「……あ」

その先の話。
彼女、立花響は守る為の力を手に入れた。
その名はガングニール。
その力はシンフォギア。
しかし、まだ足りなかった。
誰かを守る為には足りなかった。
目の前で消えてしまう命を守りたかった。
しかし。
ああしかし。
手が届かない。

あと一歩。
あと一歩あれば。
私の足がもう少し早ければ。
私の腕がもう少し長ければ。
目の前の命を救えたはずなのに。

「――――――あきらめてはいけない」

しかしそれは。
彼女の腕とは別の何かによって救われた。

「あ……」

その男はぼろ布を纏っていた。
まるで戦場から帰り着いた戦士のような姿だった。
彼は白銀の雷光を纏った右手を掲げて何かを指さしていた。
ああ、しかし。

立花響にとってそれはどうでもいいことだった。
あの人だった。
自分を守り、助けてくれたあの人だった。
自分のためにノイズと戦い、右腕を失った、あの人だった。

「お兄ちゃん……」

雷光は止まず、ただ放出されていく。
その光を纏った彼は、銀の聖者にさえ見えた。

「再び戦場に戻ることができた」

するりと右腕を下ろし、独特の構えをする彼。
その動きは洗練されており、よどみなど一切なかった。

「さあ――――――かかってくるがいい」

彼の名はトキ。

名前を捨て、トキを名乗る、ヌァザの腕を持つ男である。

トキフォギアトキ２

「て、適合率１１％……」

糞みたいな適合率！

「身体の損傷甚大……」

糞みたいなフィードバック！

「というかこの聖遺物、どこで拾ってきたの？」

質問責めもありました。

「シンフィギアとして展開できない上に、人体に複雑に絡みついている」

ついでに聖遺物の異常についてもお話がありました。

まあ簡単に言うと。

「なんでこの人生きてるの？」

この一点に尽きるのだった。

「というかこの人、響ちゃんとどういう関係？」

「ええと……」

立花響は考える。

そういえば、この人とはどういう関係だったのか。

「お兄ちゃんと言うか、守ってくれた人と言うか、なんというか」

実を言うと、よく知らないのであった。

とても強くて、とても頭が良くて、それでいて優しかった。
そして……目の前で右腕を失ったこと。
「そして右腕がヌァザの腕になっていた……」
ヌァザの腕は完全聖遺物。
それが唐突に持ち込まれたことで、様々な混乱が生じた。
というかデュランダルだけでもヤバいのにこんな状況下で完全聖遺物がもう一つとか馬鹿なんじゃないだろうか。
いいや馬鹿だ。
許せない。
一度ぶちのめしてやるわよ。
櫻井了子さんの一言でした。

しかし。
完全聖遺物たるヌァザの腕であるが、覚醒状態には至っていない。
ただノイズを殴れる力をトキに与えるだけの存在であった。
しかもノイズを倒すためには相手から接触を試みてこなければならない。
宝の持ち腐れこの上ない。

「けれど、どうしても離れないのよねぇ……」
トキ本人の了承を得て、一度切断しようと試みたものの、再度接続されてしまったヌァザの腕。
適合率１１％はどうしたのか。
「万事休す！　他の誰かに扱えるような代物じゃないわねぇ」
お手上げ状態である。
どうしようもない。
こんなの邪魔なだけじゃない。
「どうしようかしら、これ……」
計画には支障はない……はず。
ポンコツ適合者が増えたところでどうしようもないことなのだから。
「さあて……了子ちゃんに戻らないとね！」、

トキは右腕の様子を見ていた。

指の一本一本をコントロールし、動かしていく。
その度に、トキの全身には激痛が走る。
しかし、それでも。
トキは腕を動かすことをやめなかった。
「……」
終始無言。
そして無表情である。
本来であればのたうち回るほどの激痛があるはず。
それでも、彼は。
「……あ、あのー」
そこに、立花響は現れた。
かつて救われた立花響は、またしても救ってくれたトキに感謝の気持ちを伝えたかったのだ。
しかし、目の前でじっと指を動かしているトキを見て、何も言えなかったのだ。
心が折れていないトキの姿に、立花響は衝撃を受けたのである。
「どうして……そんなにも頑張るんですか？」
結局のところ、彼女には分からなかったので、聞くことにした。

だって分からないから。
そして、彼女はトキのことを知りたかったのである。
「それは……そうだな」
トキは一度口を開き、閉じた。
何かを考えている様子だった。
「助けたかったからだ」
そして一言、そう呟くのだった。
「――――」
響はその一言に衝撃を受けた。
自分と同じだ。
そう思った。
「あのっ！　私もなんです！　守りたいものがあるんです！」
トキは一瞬目を見開き、そして優しい表情をした。
一瞬顔が熱くなった響であったが、頭を振ってそれを堪えた。
「確かに守る為の力で守るのも正しい」
トキはそのまま語る。
まるで自分の体験を話しているかのようだった。

「しかし……誰かのために、近くにいることも正しいのだ」
「え……」
それは、響にとって衝撃だった。
まるで自分の意思が否定されたかのようだった。
実際はそんなことはないのだが、響は一瞬そう思った。
「私はこの力を選んだ」
「……」
「守る為の力だ」
「それは……」
「響。君は日常に戻りたいと思うか」
「え……」
それは、やはり響にとって晴天の霹靂であった。
戻れる……戻れるのだろうか。
力を得て、誰かを守れることを知った自分が、戻れるのだろうか。
「……戻りません」
響は首を横に振った。

だって、守りたいものを守れるってことは、きっといいことだから。
「そうか」
「はい！」
「響は強いな」
えへへ、と笑ってしまった響。
すぐに顔を戻そうとするが、戻らない。
にやけたままだ。
誰かに褒められるのは嬉しいこと。
響は知っているのだった。
２年前はトキからの励ましは、彼女の生きる力となった。
きっとその時の励ましがなかったら、今の自分はいなかっただろう。
そう思うほどに大きいものだったのだ。

トキフォギア３

「……む」
「おや」
休憩をしていた翼は、ついにトキと出会ってしまった。
ついに、というのもなんとなくこの男のことが苦手に思ったからである。
理由に関しては正直分かってないのだが、なんとなくだ。
「その拳に……」
「む……？」
「その拳に、何を映している？」
翼はトキに対して質問をした。
抽象的な問いであった。
しかし、彼女としてははっきりさせておきたいことだったのだ。
その拳は何を見て振るわれるのか。
その拳は何を考えて放たれるのか。
それが知りたかったのである。

「そうだな……」
「……」
その問いに、トキは悩む様子を示した。
返答がある。
つまりはあの拳には信念があるということである。
その信念とは何なのか。
翼はごくりと唾をのんだ。
「私の拳には……夢が乗っている」
「夢……？」
「ああ」
抽象的な問いに、抽象的な答えが返ってきた。
それだけなのだが、何故か翼はその答えに惹かれた。
「私の夢は、近くにいる人達が幸せに暮らせることだ」
「……」
「その割には遠回りしてしまったが、それも仕方のないことだ」
右手を握りしめるトキ。
翼はその腕が完全聖遺物であることを知っている。

そして、それに秘められた力は恐らく凄まじいもの。
「握りしめたままの拳では、打ち砕くことしかできない」
「……」
「しかしその拳を開けば、誰かと繋がることができる」
「……」
「誰かと繋がれば、きっとそれは幸せにつながる。そんな夢だ」
綺麗ごとだ。
それは彼にもわかっているのだろう。
だからこそ夢だと言っているのだろう。
だからこそ叶えたいと思っているのだろう。
「私の拳が何を映しているのか、分かってくれただろうか」
「……はい」
その笑顔に、翼は何かを思い出したような気がした。
しかしそれは即座に消えて行ってしまった。
まるで、何かを否定しているかのように。
「君は……」
「はい？」

「君のシンフォギアは剣なのだったな」
「……はい」
彼は剣である自分を何と言うのだろうか。
黒鉄のように冷たいと言うのだろうか。
刃のように鋭いと言うのだろうか。
「……剣は、綺麗だ」
「ふぁっ!?」
唐突な誉め言葉に混乱する翼。
初めて言われた言葉である。
いやまあ、容姿を褒められたことはあるが。
「槍があるだろう?」
「は、はあ……」
「あれは刃を先端にのみ付けた武器だ。剣とは趣が違う」
その通りだ。
剣と槍は得意な距離も違う、別種のものだ。
それがなんだというのか。
「大きな刃を作るのには技術がいる。そしてその技術の結集が剣だ」

「……」
「それが美しくないわけがない」
勿論槍が美しくないわけではないと言い、トキは立ち上がった。
それを見て、翼はトキを見送ることにした。
敵にはならないだろう。
そう判断したからである。
「今度は君が剣に乗せる思いを知りたいな」
そしてそのまま立ち去るトキ。
なんだあの男……。
翼はそう呟いて呆けてしまった。

「立花……あの男はやめておけ」
「なにが!?」

トキフオギア４

雪音クリスは敵対するとある男と相対していた。
彼はそもそもギアを装着していない、言うなれば一般人ではないかと最初は思っていた。
しかし、見てみれば右腕が聖遺物。
つまりは敵であった。
「その腕、どこで拾ってきたんだぁ？」
語り掛け、同時に攻撃を投げつける。
牽制だ。
距離は離れている。
相手は素手。
殴られる心配はない。
「とある極寒の地さ。あまり人のいないな……」
しかし男はその攻撃を逸らすと同時に肉薄してきた。
あまりにも早い。

防御が追いつかない。
「ふん！」
「かはっ！」
一撃、腹に直撃した。
放たれた突きが雪音クリスの脇腹を貫いた。
痛みが走り、それと同時に破壊音が響く。
あの一撃でネフシュタンの鎧が砕けたのだ。
そして追撃が来る。
流石にそれを受けるわけにはいかない。
蹴りを繰り出して距離をとる。
男はわざと受けて跳び、ダメージを減らしたようだ。
「少女よ……」
「なんだよおっさん」
投げやりに返事をすると、男は目を見開いたかと思うと笑いだした。
なにが面白いのか分からない。
「ふふ、君はコミュニケーション能力が乏しいと言われたことはないか？」
「はっ！　生憎、そういうことを言うような相手と会った事がなくてね！」

攻撃を放つ。
今度は直線的なものではなく、波打つような一撃だ。
回避などさせるものか。
しかし、男はそれを見抜いていたかのように距離をとり、波打つそれの先端を蹴り上げた。
勢いが横から縦へと変換された。
「ちぃ！」
体勢を立て直す余裕はない。
先程の速度を考えるに、そんなことをしている間に攻撃が来る。
雪音クリスはわざとその勢いに乗り、上空へと跳ね上がり、そこから2発目を放った。
不意打ちに近いそれ、どう避ける。
「勝機！」
「なんだとぉ!?」
男は2発目のそれに乗り、駆け出した。
刃であり鞭のようでもあるそれを足場に、雪音クリスへと駆け出したのだ。
ありえないという思考と、まずいという思考が頭一杯に広がり、かき消そうとしたところで男の拳が雪音クリスに届いた。

「天翔……百裂拳！」
連打だ。
何発もの突きが雪音クリスを貫いた。
まるで全身を鉄杭で貫かれたかのような痛みに、一瞬意識を失いかける。
が、それで屈する雪音クリスではない。
最後の力を溜めた突きを放たれる直前に、蹴りを繰り出した。
男は予想外の反撃を受けて吹き飛び、上空を舞う。
そこに、手元まで戻った１発目の刃であり鞭であるそれを放った。
獲った……！
「北斗翔輪脚！」
しかし、それを男はサマーソルトキックを放つように回転、弾き飛ばした。
まさかの反撃に何もできないまま、雪音クリスは着地せざるを得なかった。
着地を狙う暇もなかったのである。
「……というかあんた」
「何か、聞きたいことでも？」
雪音クリスは構えをとったまま、男へと問いかける。

ただ何となく、聞いてみたいと思ったからだ。
「剣もなにもない、素手のお前が握る物は何だ?」
恐らくは最後になるだろう。
これ以上はただの戦が始まる。
「私は大切な物を守るという夢を握りしめて戦っている。故に命を懸けているということだ」
男も同じ気持ちのようだ。
拳を握り、構えをとっていた。
「へっ、そうかい。んじゃまあ、その命とやらを握りしめたまま死んでいけえ!」

暫く後。
雪音クリスは立花響や風鳴翼と一緒に戦うことを選んだ。
そしてついでにトキとも一緒に戦うことになったわけだ。
「……」

「……む、どうした？」
そして、一緒に戦うことになって初の顔合わせである。
殺し合いになったことを何とも思っていないような顔であった。
なんだかもやっとした。
「あんたは……敵だった人間と肩を並べて戦うことに異論はないのか？」
面倒臭い性格なのは自覚しているが、一応聞いてみる。
この男がどう思っているか、気になっているのも事実だからだ。
「ない」
即答だった。
何故か。
そう思っていたが、その台詞にすぐに言葉が続く。
「ともに肩を並べた以上、それは友であり同志だからだ」
「友……」
「ああ、友だ」
勝手に友達にされていたらしい。
年齢的には男の方が一回りは上だろうか。
そんな相手に唐突に友人宣言されるのはなんだかむずかゆい。

「そ、そういえばあいつがお前に執心らしいじゃねぇか」
そこんとこどう思ってるんだ、と話題を逸らす。
嘘ではない、風鳴翼に聞いたからだ。
なんだか困ったような顔をしていたが、その機敏を感じられるほど雪音クリスは人間関係に聡くはなかった。
「で、どうなんだよ。立花響のこと、どう思ってるんだ?」
普通聞かねえだろこんなこと、というところまで聞いてしまうのが彼女であった。
というかそういうのに疎いにもほどがあった。
「大切な妹のように思っているよ」
当たり障りのない返事。
それが不満なのか、雪音クリスはむっとした。
「そんなもんかぁ? もっとこう、ないのか?」
何がどうとか考えてはいないが、雪音クリスは質問を続ける。
本当に考え無しであった。
「そうだな……」
トキは考え込む。
どうしたらこの質問娘が納得するような答えを出せるのか。

「可愛い女の子だと思うよ。君も同じようにね」
そう言ってすたすたと歩いて行ってしまうトキ。
雪音クリスは追いかけることなく、その台詞を脳内で繰り返していた。
「……？」
繰り返した結果、よくわからなかった。
雪音クリスに人間関係の話題は早すぎたのであった。